

上高地のイワナ — その後の行くえ

信州大学教養部 吉田利男

自然界でみられる「種の隔離」が、人為的攪乱により、その存在がくずれかけている。上高地のイワナが「幻のイワナ」になりかけていることを、先に紹介した(吉田・1980)。その後、どうなっているのか?簡単に紹介しよう。

1981年3月、環境庁に“上高地・梓川上流域のイワナに関する検討会”が作られた。私も今迄のいきさつ上、検討会の委員に依頼された。この検討会の設置の趣旨は下記の通りである。ある生物種を本来の生息地において、人為的攪乱を排して保護・増殖を図っていくことは、その種が保有する種々の価値(学術的価値・資源的価値・レクリエーション的価値等)を損うことがないという点で、最も望ましい保全の在り方と思われるが、すでに、人為により改変を受けた自然をどのように保全(原状回復も含む)していくかは、改変された自然の特質と意味を十分把握した上で決定されねばならない。大正池周辺で確認されたイワナとカワマスの交雑現象は、これによって当該水域の魚類の減少が生じるなら、どのような面からみてもマイナスであるが、逆に魚類の増加・魚類相の多様化がもたらされるなら、水産資源・レクリエーション資源という面からはプラスとされる点が多いと思われる。交雑の結果、当該水域の魚類群集構造がどのように変化していくか、また交雑種が当該水域のどの範囲にまで及んでいるか等が、ほとんど把握されていない現段階では、上高地の水域をどのような状態に置くのが望ましいのかは実態把握を含めて各種の検討が専門家や地元水産関係者等によってなされる必要があると考えられた。検討会において討議される事柄や具体的提案が当該水域における今後の保護増殖事業に活かされて魚類資源の適正な保全の推進に寄与することが望まれる。以上のことから、検討委員に下記の方々が多られた。野村稔(東京水産大教授)・中村守純(前国立科学博物館動物第二研究室長)・木村英造(淡水魚保護協会理事長)・久保達郎(北大助教授)・鈴木亮(水産庁養殖研究所遺伝育種部長)・木村清朗(九大・助教授)・吉安克彦(イワナ研究者・医師)・上原武則(長野県丸子実業高校教頭)・富永正雄(長野県水産指導所長)・奥原保憲(長野県安曇漁業協同組合長)・沖恍三(中部山岳国立公園管理事務所長)と私である。私をのぞき、国内のサケ・マス科魚類(とくにイワナ)の増殖・遺伝・生態・分類・保護等の優秀な研究者である。ところで、検討委員会は数回

に亘る会議と二回(夏と秋)の現地調査を行なった。さらに、これらの調査資料や既存の資料をもとに討議がなされた。委員会としての報告書が近々出されるはずである。それをもとに環境庁はなすべき方法を考え出すであろう。それは、それとして、2回に亘る現地調査で、どんなことがわかったのであろうか?

既存調査結果に基づき現状把握と問題点の抽出と取り得べき具体的対策がなされ、1981年6月2~4日に現地に入った。ここでは、中部山岳国立公園の特別保護地区で、長野県下で最も古くから魚類の増殖が行われてきたところであり、在来種のイワナの他、ヤマメ、アマゴ、ヒメマス、ニジマス、カワマス、ブラウン・トラウト等の計6種の内外のサケ科魚類が多数移入された。これらの結果、現在の上高地の魚相をみると、ニジマス、ブラウン・トラウト、アマゴ等の定着は悪く、イワナとカワマスが大部分を占めているが、その大半はこれら両種の雑種で、在来種のイワナの数は少なくなっているといわれている。この状況は、大正池周辺における捕獲調査によるものであるが、大正池より上流部及び支流についての魚相及び河川の状況を把握するために、地元漁協の全面的な協力の下に調査を行なった。その結果は、大正池周辺では前回の調査結果と同じく、放流魚種がほとんどを占めていた。すなわち、イワナとカワマスの雑種は大正池付近にもっとも多く分布し、本流の明神橋を境に、その上流と、ほとんどの支流にはいない。大正池から明神池までの本流でも放流魚種のイワナ(木曾系のイワナ)が、明神池ではブラウン・トラウトとカワマスが圧倒的に多かった。明神池より上流域ではアルプス系のイワナ(地のイワナ)がほとんどであった。カワマスは大正池付近(田代池)や明神池に多く生息していた。この調査で、アルプス系イワナが明神橋より上流の梓川本流・支流に分布・生息しており、また放流魚種は明神橋より下流の本流や明神池・大正池を主に生息の場に行っていることがわかった。とくに、カワマスは源流域の湧水が流れ出る池や河川を生息場にしており、原産地でみられる生息環境と良く類似していることがわかった。次に、1981年10月21~23日に繁殖期の産卵活動状況を観察し、雑種形成が事実、あるのかどうか等を知るために第2回の調査が行なわれた。イワナは10月初旬~11月初旬に、カワマスは11月初旬~12月中旬に産卵活動がなされる。台風に見舞われての調査であったが、産卵活動中の幾組かのペアー

が見られた。ほとんどがイワナ同志のペアで、他にイワナと雑種のペア、カワマスとイワナのペア等もあり、また産卵活動に加わっていた雑種の♂成魚では精巣が未発達であった。

なんとなく上高地梓川全体の魚類の様相がつかめてきたようだ。明神池・田代池・大正池では放流移植のカワマスやブラウン・トラウトが定着、明神より下流の本流ではカワマスとイワナの雑種がみられ、明神より上流域にはアルプス系イワナがいるというように、なんとなく棲み分けしているようにも見られる。しかし、放流事業による移植魚の導入は、その河川生態系の構成メンバーを変え、ひいてはもとい種を追い払う（滅亡させる）ことになりかねない。近縁の同属の種の交配は雑種強勢など生物的利点はあるものの、それを自然の生態系に組み入れることは、様々な問題をなげかけることになるのではないか。